鹿児島女子短期大学紀要
1992年第27号175～191頁

A nocturnall upon S. Lucies *day, Being the shortest day* にみられる他者意識

後　藤　廣　文

A nocturnall upon S. *Lucies* day[1], Being the shortest day

Tis the yeares midnight, and it is the dayes,
Lucies, who scarce seaven houres herself unmaskes,
  The Sunne is spent, and now his flasks
  Send forth light squibs, no constant rayes ;
    The worlds whole sap is sunke :
The generall balme th'hydroptique earth hath drunk,
Whither, as to the beds-feet, life is shrunke,
Dead and enterr'd ; yet all these seeme to laugh,
Compar'd with mee, who am their Epitaph.

Study me then, you who shall lovers bee
At the next world, that is, at the next Spring :
  For I am every dead thing,
  In whom love wrought new Alchimie.
    For his art did expresse
A quintessence even from nothingnesse,
From dull privations, and leane emptinesse :
He ruin'd mee, and I am re-begot
Of absence, darknesse, death ; things which are not.

All others, from all things, draw all that's good,
Life, soule, forme, spirit, whence they beeing have ;
  I, by loves limbecke, am the grave
  Of all, that's nothing. Oft a flood
    Have wee two wept, and so

Drownd the whole world, us two ; oft did we grow
To be two Chaosses, when we did show
Care to ought else; and often absences
Withdrew our soules, and made us carcasses.

But I am by her death, (which word wrongs her)
Of the first nothing, the Elixer grown ;
  Were I a man, that I were one,
  I needs must know ; I should preferre,
    If I were any beast,
Some ends, some means; Yea plants, yea stones detest,
And love ; All, all some properties invest ;
If I an ordinary nothing were,
As shadow, a light, and body must be here.

But I am None ; nor will my Sunne renew.
You lovers, for whose sake, the lesser Sunne
  At this time to the Goat is runne
  To fetch new lust, and give it you,
    Enjoy your summer all ;
Since shee enjoyes her long nights festivall,
Let mee prepare towards her, and let mee call
This houre her Vigill, and her Eve, since this
Both the yeares, and the dayes deep midnight is.

I

John Donne（1572－1631）のこの詩は，恋人の死によって絶望の淵に立たされた話者が，その悲しみを克服するために他者を否定することによって，独自の世界を創り出すことを語る詩である。しかし，恋人を亡くすことによって抱く話者の絶望的な悲しみには深く重いものがあり，行間ににじみ出るその話者の心情がこの詩に豊かな叙情性を与えるのである。恋人の死によって一切をなくしてしまった話者は自らの死を意識し，冬至の日である「聖ルーシーの日」（'S. *Lucies* day'）の冬枯れの死の様相を呈した自然に自らを喩えるのである。そして，恋人を亡くすことによって，生きて行く希望も目的も奪われた話者の暗たんたる想いが夜を示す 'nocturnall' という語で表される。夜にしろ，聖ルーシーの冬至の日にしろ，やがて朝が来，現実の世界（他者）は新しい生，春を迎えるのに，話者には巡り来るべき朝も春もないのである。話者のこの悲しみの重さが話者をして他者を否定させるのである。他者とは

まったく違う立場に置かれているという話者の意識が，他者との対立意識を生み，他者の世界とは異質の新しい世界の構築へと話者を向かわせるのである。この新しい世界が，錬金術の metaphor，天地創造の metaphor によって，説明されるのである。新しい世界とは恋人と話者の愛の世界であるが，これを錬金術師のついぞ果たし得なかった世界霊とでも言うべき「第五元素」と天地創造の源である神のイデアに喩えることによって，二人の愛の世界に霊性と永遠性とが与えられるのである。しかし，話者の愛の世界も，他者を否定することによって直線的になされたものではなく，そこに至る迄の話者の内面には激しい揺れ動きがある。これは霊と肉の二元論に分裂させられた話者の姿を映し出すものであり，恋人の喪失による悲しみの克服が語られるこの詩の中に，時代の影が落されているのである。また，二人の愛の世界が「蒸留器」という小さなものに喩えられているのも，分裂した時代に対する話者の姿勢が表されている。分裂し，混乱した時代の中にあって，自己の世界を確立し守るためには，現実，つまり，他者を否定し，他者に背を向けざるを得ないのである。これについてはⅢの結論で述べることとし，Ⅱの本論では話者の達した霊的永遠の世界を解明することにしたい。

Ⅱ

この詩はⅠの序論で述べた通り，恋人を亡くした話者の深い悲しみ，絶望感をうたったものであるが，その悲痛な想いが「一年で一番短い日」（'Being the shortest day'），即ち一年で一番夜の長い冬至で表されるのである。従って，冒頭行の「一年の真夜中」（'the yeares midnight,'）は冬至を示す語だが，夜の長さと暗さを伝え，静まり返った夜の闇の中で悲嘆に暮れる話者の姿を示唆する語句でもある。次の「一日の真夜中，ルーシーの日」（'it is the dayes,／*Lucies*,' ll. 1−2）という句は，イタリックスの*Lucies* が恋人の名前を示唆しながら，昼間の最も短いことを示し，これが「7時間も顔を出さない」（'who scarce seaven houres herself unmaskes,' 1. 2）という表現になるのである。「7時間」というのは正確ではないようだが[2]，次の行の太陽の力の衰えを強調するための表現である。冬至の聖ルーシーの日は恋人を亡くした悲痛な思いの話者の metaphor である。かけがえのない恋人を失い，生きる光をなくし，真暗闇に投げ出された話者の心境が聖ルーシーの日の真夜中で表されているのだが，この第2行に異常に多用された耳障りな［s］はすすり泣く話者の姿をほうふつとさせるものがある。この［s］が次行冒頭の 'The Sunne is spent,' の頭韻（［s］）に示される太陽の力の衰えと呼応し合って，世界の崩壊を暗示するのである。冬至の日の太陽の陽射しの弱さは自然界の崩壊と死を予測させるものであるが，これが，恋人の死によって全世界を崩壊させられた話者の死の意識を提示することになるのである。今正に死ぬが如くの力の弱まった太陽は，その恩恵を直接受ける自然界に，死を与えることになる。天界にあって太陽の光を受け，それを蓄え[3]て光を放つという「星は，今，弱い曇勝ちな光を放つ」（'now his flasks／Send forth light squibs, no constant rayes ;' ll. 3−4）に過ぎない。'his flasks' は星のこと[4]である。'his' は太陽の代名詞で，いま述べたように，星は太陽の光を受け蓄え放つからである。'flasks' とは兵士が携える火薬袋のことだが，火縄銃式の鉄砲の火薬のさく裂の光を星のそれに喩えたものである。この conceit の効果は 'light squibs' と 'no constant rayes' とを考え合わせる時に発揮される。春から四季を巡る太陽が冬至に至って最も弱体化するように，戦闘中の兵士

もやがて火薬を使い果たし，彼の鉄砲の発する光も弱くなることを示すものである。戦闘中の兵士にとって火薬がなくなることは正に死を意味することになる。つまり，‘flasks’は単に星の光の弱まりを示すだけでなく死をも暗示することになるのである。また，‘flasks’は「フラスコ」の意味もある。これは第3連の‘limbecke’（「蒸留器」l. 3）に用いられる器具であるから錬金術用語でもある。17世紀にはまだ錬金術は廃れることなく一つの大きな思想を形成していたが，死を暗示するこの‘flasks’という語の使い方に錬金術思想の衰退が暗示されていると考えられる。さて，冬至の太陽の力の衰えが自然界に大きな影響を及ぼすのは当然のことだが，次行の「世界のすべての樹液が地下に下りる」（‘The worlds whole sap is sunke :’ l. 5）という表現は自然界の死の様相を示すものである。‘sap’（「樹液」）は‘The vital juice or fluid which circulates in plants.’（OED, 1.）[5]と説明されるように，樹木はこれがなければ生命を維持することは不可能なのである。つまり，この句は冬枯れによる自然界の死を表すものである。次行の「水腫病の大地がすべての樹液を呑み込んだ」（‘The generall balme th’hydroptique earth hath drunk,’ l. 6）という表現も，同様に，自然界の死を示すものである。‘th’hydroptique earth’とは水腫病患者が飽くことなく水を欲しがる[6]ことから来た喩えである。‘balme’は，先ず‘sap’と同じものと考えなければならないが，‘Aromatic ointment used for soothing pain.... ’（OED, 5.）という意味もあり，これは恋人の死によって受けた話者の苦痛をいやすものすら失われていることを示すことになる。どんな慰めも見い出すことができず，悲しみもいやすことができない暗たんたる想いから，話者は自らの死を想い遣らずにはおられないのである。「生命は，ベッドの脚に下りて行くように，大地に退いて行く」（‘Whither, as to the beds-feet, life is shrunke,’ 1.7）という表現の中の，‘as to the beds-feet’は，現代の我々には理解し難いが，人の生命は次第に足の方へ下り，ベッドの脚を伝わって地面に入る[7]と考えられていたのである。これは，死にゆく自然・世界を，臨終の床にある人間によって具体的に説明するものであるが，このmetaphorはmarocosmとmicrocosmの対応の論理が下敷になっている。当時の思想体系の一つである「存在の鎖」[8]に従って人間は天使と交感できる霊的部分と動物以下鉱物（石）に至る（St. Ⅳ, ll. 31－34）肉体的・物質的部分とを併せ持ち，天界及び地界のすべての映し身であると考えられていたのである。つまり，死を想う話者そのものなのである。恋人を失うことで話者の世界は崩壊し，話者は死の意識を募らせるのである。従って，‘the beds-feet’は独りで真夜中の暗闇の中で死の想いにとらわれてベッドに横になっている話者の姿を伝える語句である。また，聖ルーシーの日の夜を恋人の通夜と考えれば，恋人の死を弔って話者が死んだ恋人を見守っている姿も想像できようが，話者が自らの世界の崩壊による深い悲しみと死の意識を抱いていることに間違いはない。‘Whither’は副詞だが，この語には同音のwitherのpunがある。また，‘shrunke’には‘To wither...through withdrawal of vital fluid....’（OED, 1.）の意味があり，‘whither’のpunを伴って生命の衰退，つまり，死が強調されることになる。そして，次行8行目の冒頭の‘Dead and enterr’d ;’で自然界の死，世界そのもの死，が表されるのである。vital fluidである‘balme’が樹木から地面に後退し（‘enterr’d’），なくなれば樹木は死ぬ（‘Dead’）。自然の死は話者の死であるから，この連の最終行で，話者は死んだ自分を「その墓碑銘」（‘their Epitaph’ l.9）と言うのである。‘their’は一切の自然界を指す語である。もちろん，「墓碑銘」のmetaphorは，先に述べたように，macrocosm-microcosmによって支えられているのだが，恋人を亡くすことに

よって話者の世界が崩壊し，その崩壊が話者にとっては全世界の崩壊を意味することになるので，話者は「その墓碑銘」となるのである。さて，'Epitaph' は，死んだ自然の，いわば，埋葬を示す 'enterr'd' より，話者の悲しみが重く深いことを表す語である。つまり，'enterr'd' は vital fluid である「樹液」が地下に下りてしまい樹木が死んだ（'Dead'）ことを示す語で，「ベッドの脚」に喩えられた人間の死を考え合わせれば埋葬を意味することになり，「墓碑銘」と対比を成す語であることがわかる。従って，'enterr'd' は今埋葬されたことを示し，'Epitaph' は既に埋葬されていることを示す。この死の時間の差が話者の深い悲しみと孤独感を表し，「墓銘碑となった僕に比べれば，自然界は（その苦しみも少なく）笑っているようだ」（'yet all these seeme to laugh'／Compar'd with mee, who am their Epitaph.' ll. 8－9）という表現が生み出されるのである。第1連冒頭から8行目前半迄は自然界と話者の世界が重ね合わされ，いわば，一体のものであったが，'yet' 以下のこの一句で，この両世界の乖離が示されるのである。ここに至って初めて話者は自己以外の世界を強く意識するようになるのである。'laugh' は外の世界に対する話者の他者意識を示唆する語であるが，他者が笑う，あるいは，他者に笑われるという意識は一種の疎外感の表れである。さて，'Epitaph' は「墓銘碑」であるから，墓石に何事か書かれていることになる。これが第2連の内容となるのである。この連の冒頭2行に他者が導入され，他者に「この墓銘碑を学べ」（'Study me then'）と話者は言う。他者が「次の世，即ち，次の春で恋人となるあなた方よ」（'you who shall lovers bee／At the next world, that is, at the next Spring :' ll. 1－2）と表されることによって，他者，つまり，現実の世界の恋人たちの愛のあり方が説明される。現世の恋人たちは 'Spring' を迎えることによって，再び旺盛で活発な愛を得ることになる。しかし，春は巡り来る季節の一つであるから，恋人たちが今冬を迎えているように，その愛は変化することになるのである。彼らの愛が変化するのは変化を受け入れる肉体に根差した官能愛だからでもある。他方，話者は恋人を亡くすことによって一切の官能愛をなくしたが，それでも尚，恋人を想い，死を意識する程愛しているのである。この話者の愛は霊的であり，現世の恋人たちにはなし難い愛である。従って，現世の恋人たちからすれば，話者は奇跡的とも言える愛をなしたことになり，故に「僕を学べ」（'Study me then'）という表現となり，この愛の奇跡が「墓碑銘」として記されることになるのである。この話者の愛の奇跡が，錬金術の metaphor を使って，以下この連の最終行にわたって詳しく述べられる。話者は，前連最終2行の内容を受けて，「僕はあらゆる死せるもの」（'For I am every dead thing,' l. 3）なのに，「愛が新しい錬金術を生み出した」（'In whom love wrought new Alchimie.' l. 4）と話者は自らの愛の奇跡を説明する。しかし，これだけでは愛の錬金術の奇跡を充分説明することにはならないので，更に，「愛の業によって，もの憂い喪失感と不毛の空虚から，無そのものすらから，精粋を抽出した」（'For his art did expresse／A quintessence even from nothingnesse,／From dull privations, and leane emptinesse :' ll. 5－7）と言う。普通錬金術は，手短かに言えば，物質を溶解・分離し，蒸留・昇華の過程を経て，最終目的物，例えば，「精粋」（'quintessence'）を取り出す術である[9]。溶解は物質の死であり，分離は物質をその構成要素である四元素に戻すことである。つまり，話者は「無そのもの」（'every dead thing' l. 3）から「精粋」を抽出したのだから「新しい（愛の）錬金術」を生み出したことになるのである。無から有を生み出すという逆説がこの連の論理を構成し，話者のなした愛の奇跡を説明するのである。ところで，'expresse'（l. 5）は，H. Gardner 氏が

‘squeeze out, or extract, a techical term from alchemy’[10]と説明するように，錬金術用語であると同時に，「精粋」を抽出するのは容易ではなく大いなる苦しみを伴うことも表す。この苦しみが‘noth-thingnesse’ ‘dull privations’ ‘leane emptinesse’ に込められている。‘nothingnesse’ は恋人の死と，死によって受けた話者の脱力感・無力感を表す語である。この話者の心理状態が ‘dull privations’ ‘leane emptinesse’ に，より具体的に詳しく述べられている。‘dull privations’ は文字通り死によって恋人を奪い取られたことを示すが，複数形であることから，恋人と共にあることの喜び一切が奪われ，そのために，一切の感情・感覚がなくなり，呆然自失の状態にある話者の姿を活写する語句である。因みに ‘dull’ には ‘...insensible, obtuse, senseless, inanimate.’（OED, 2.）の意味がある。‘emptinesse’ は，これも文字通り，話者の心にぽっかりと穴の開いた状態，つまり，空虚感を表す語であるが，‘dull privations’ 以上に話者の虚無感を伝える語である。‘leane’ は話者のこの空虚感・虚無感を具体的に伝える語である。植物で言えば，やせ過ぎて実を結ぶことができないこと，即ち，不毛であることを意味する。この語から，深い悲しみのためにやつれ果てた話者の姿を，一条の光も一るいの希みすらない，いはば，絶対的絶望といった状態にある話者の姿を思い浮べることができよう。この絶望の淵にたたずむ話者を支えているのは恋人への愛である。それが ‘quintessence’ という言葉に込められている。前に「精粋」という語を当てはめたが，「第五元素」という意味もある。人間を含め自然界はすべて地水風火の四元素で成り立つと考えられていた[11]が，第五元素は，目には見えないが，自然界（地界）のすべてのものに内在すると同時に，天界を構成するものであり，蒸留その他の方法によって，第５元素を抽出することが錬金術の最大の目的であった[12]。つまり，第五元素は他の四元素とは異なり，目には見えないが天地のすべてのものに存在する霊的なものである。従って，「愛の業によって，……無そのものすらから，第五元素（精粋）を抽出した」（ll. 5－6）という表現は，恋人を亡くしても，いや亡くした故に，愛は強くなるという話者の気持を語るものである。話者の愛は，恋人を亡くすことによって，官能的愛を伴わない純粋で霊的な愛だという意味が付与されるのである。第五元素が天界を構成するものであるという ‘quintessence’ に内包された意味によって，話者の愛に霊性が与えられるだけでなく，まったく変化を受けない月以上の天界の永遠性も与えられることになるのである。従って，話者は次の行のように，「愛は僕を破壊したが，僕は非在，暗闇，死，不在から生まれ変わった」（‘He ruin’d mee, and I am re-begot／Of absence, darknesse, death ; things which are not.’ ll. 8－9）と言い得るのである。現世の愛は話者を破滅させたが，その愛は霊的愛となって生まれ変るのである。しかし，‘ruin’d’ とは激しい言葉遣いである。話者の心がずたずたに引き裂かれてなくなってしまったことを示す語であるが，話者のこの状態を「非在」「暗闇」「死」，即ち，「不在」で表す。恋人が死んで，この世にはもういなくなり（‘absence’），そのために，話者は生きて行く力を失い，暗たんたる想いに駆られ，絶望し（‘darknesse’），恋人を想うこと以外の精神活動を一切停止し，正に死んだも同然（‘death’）なのである。しかし，恋人の死によって，却って，話者は恋人に対する愛を強く意識し，それ故に話者は自分の愛が霊的であることを確信するのである。従って，今の話者の愛は生前の恋人との愛とは違うことになり，その愛は官能的愛から霊的愛へと「再生」（‘re-begot’）したのである。この話者の論理は，‘ruin’d’に内包された錬金術の metaphor によって支えられている。C. A. Patrides 氏が言うように[13]，この語は物質を四元素に戻す錬金術の操作過程の１つを示す。従って，‘ruin’d’ は物質の

死を指すのであり，物質を「破壊する」（'ruin'd'）ことはその物質の形，即ち，形相（'forme' St. Ⅲ, l. 2）を失わせることである。物質が破壊されることによってその物質は形相を失い（'absence'），死ぬ（'death'）のである。また，錬金術では死は終りではなく始まりなのである。物質の死によって初めて溶解・分離が可能になるのである。錬金術は地上に存在する物質から神の創造の秘義を解明しようとするものであるから，創世記の神による創造過程の逆をたどることによって，その目的物を見つけ出そうとする思想大系である。つまり，錬金術の操作過程は天地創造の過程と対照されるのである。さて，物質の死は，例えば第五元素のような新しい生を生み出すための第1段階である。この死は再生の始まりだという錬金術の思想が，恋人の死によって新しい霊的永遠の愛に目覚めた話者の再生の metaphor となるのである。しかし，それでも尚，話者は外の世界（他者）に眼を向けざるを得ないのである。恋人を失った話者の負った心の痛手はなかなか消し去ることはできないものである。自分以外のすべては何の変化もなく，いつも通りだという話者の他者に対する想いには悲痛なものがある。次連冒頭の2行の「すべて他のものは，あらゆるものから，生命，霊，形相，魂の，これによってものは存在するのだが，よきものすべてを取っている」（'All others, from all things, draw all that's good,／Life, soule, forme, spirit, whence they beeing have ; '）という表現には話者の他者に対する複雑な想いが込められている。1行目で3つの 'all' が繰り返され，他の3つの長母音と重なり合って，話者の嘆きの声が聞こえて来るようだ。'All others' は，本来は，話者以外の人間（他者）を指す言葉だが，ここでは形（'forme'）を持つものすべてが含まれて，話者の悲しみを強める。「存在の鎖」に表されたすべての物の上下の順序づけを 'Life' 'soule' 'forme' 'spirit' の4語で考えれば，これらの有無によってその関係を説明できる。人間はこのすべてを持ち，その中でも 'soule' は人間固有のもので，霊的なものとして考えられ，人間と動物を区別するものであった。'spirit' は 'soule' と身体を結びつける役割をなすものである。動物には 'soule' はないが，'spirit' はあって五感の働きを持つ。植物は 'spirit' はなく，'Life' と 'forme' だけである。最下位の鉱物は 'forme' のみである。このことは第4連でも説明されている。いずれにせよ，話者はすべての形のあるものに対して羨ましさをおぼえるのである。それで，再度，話者の空虚な心の内を「僕は，愛の蒸留器によって，一切の無の墓となった」（'I, by loves limbecke, am the grave／Of all, that's nothing.' ll. 3−4）と表す。恋人の死によって話者の愛の世界は崩壊し無に帰したことを示す句であるが，ここでも錬金術用語を使って，崩壊した愛の世界の再生が示唆されている。'limbecke' は alembic，つまり，「蒸留器」のことであるが，「浄化」の意味も同時に含まれている。世界を崩壊させられた話者（'He ruin'd mee' St. Ⅱ, l. 8）は死んで（'grave'），溶解・分離の過程を経て，蒸留の段階にあることを 'limbecke' が示しているのである。従って，「愛の蒸留器」は，話者の愛が恋人の死によって官能性を失い，霊的な愛に浄化され，再生に向っていることを示すと同時に，話者の世界が外の世界とは隔絶された話者特有のものであることを暗示する。これについてはⅢの結論で詳しく述べたい。もちろん，「愛の蒸留器」は前連の「第五元素」（l. 6）の抽出を予想させる語句であるから，話者が現実の世界の恋人たちのなし得ない愛の秘義を具現していることを示唆していることになる。これによって，この連の冒頭にうかがわれる他者に対する話者の心のぐらつきの修正が表されるのである。自らの愛の偉業を意識することで，他者に対する想い，つまり，内面の動揺を話者は克服するのである。また，この偉業が「墓碑銘」（St. Ⅰ, l. 9）に記されるのである。

しかし，話者は，恋人を亡くしたということだけで，愛の偉業をなし遂げた訳ではない。次の第4行後半以下この連の最終行にわたって，生前の恋人との愛が如何に激しく，深いものであったかということが述べられる。人を愛することによって生れるさまざまな克とうが激しければ激しい程その愛は深まるものであるが，この深まりが錬金術用語，‘limbecke’の持つもう一つの意味「浄化」によって表されている。つまり，浄化されればされる程その愛は純粋になり霊性を帯びるのである。この浄化過程が次の行以下で表されているのである。また，「愛の蒸留器」は話者の愛の空間を示す語句であるが，先に述べたように，外界とは隔離された独立した完全な世界を形成していることを表す。一度は外の世界に関心を示したものの何らの心の慰めにはならず，却って，悲しみは増すばかりなので，話者は自らの世界である「愛の蒸留器」に戻らざるを得ないのであるが，これを契機として，話者は生前の恋人との愛を回想することになるのである。この話者の中の時間の逆行が，次の「洪水」（‘flood’）から「混沌」（‘Chaosses’）へと逆にたどる創世記のmetaphorと重なり合って，一つのドラマを構成するのであるが，これはまた，先に述べたように錬金術の基本的思想でもある。さて，生前の恋人との愛の有様を，先ず，「二人は泣いて，よく洪水を引き起した」（‘Oft a flood／Have wee two wept,’ ll. 4－5）と表す。例えば，愛し合う二人にとって，暫くでも離れ離れにならなければならないのは悲しいことである。この気持は‘wee’‘wept’の頭韻と‘wee’‘two’の長母音に表されている。「それで，僕たち二人の世界を溺れさせた」（‘and so／Drownd the whole world, us two ;’ ll. 5－6）も悲しみの具体的表現で，さめざめと泣くことを示すが，前行と同じ頭韻が使われ，長母音・二重母音が多用されている。恋人たちにとっては二人が全世界であるものだが，*The good-morrow* には，恋人たちの完全な愛の世界が

> My face in thine eye, thine in mine appeares,
> And true plaine hearts doe in the faces rest,
> Where can we finde two better hemispheares
> Without sharpe North, without declining West？　(St. Ⅲ, ll. 1－4)

と描かれている。見つめ合う二人の眼にそれぞれの姿が映り，それぞれの姿の映った眼球を南半球・北半球に喩え，二人が一つの完全な世界をなすのである。「寒さの厳しい北も，陽の沈む西」もない二人の愛の世界は充足しており，また，「北」「西」という語を使うことによって，東西南北のすべてを示唆し，南北半球の喩えと同様，二人が全世界を内包することになる。二人は全世界を内包するだけでなく，その世界は完全充足し，しかも，「崩壊」（‘declining’）することのない永遠の世界なのである。もちろん，この句にもmacrocosmとmicrocosmの対応関係が意識されている。つまり，恋人たちの眼に映るのはそれぞれの姿だけでなく，世界の半分が映し出されていることになるのである。また，総カガミ張りの部屋の中に立つと，自分の姿が限りなく小さく映し出されるが，見つめ合う二人の眼に，それぞれの姿が限りなく小さく映し出されていることが想像される。これは二人の世界の無限性，つまり，永遠性を説明することになるのだが，同時に，二人の世界の縮小が暗示され，話者の小さなものへの志向が示されることになる。これは，本詩の「蒸留器」という小さなものに愛の世界を喩える話者の志向と

同じものである。さて，「(涙の洪水が) 僕たち二人の世界を溺れさせた」という表現は誇張表現であるが，このペトラルカ風の常とう句を利用して，我々に創世記のノアの方舟を想起させるのである。悔い改めようとはしない人間に神が御怒りになって，洪水を起し，滅亡させたという故事である。これはノア一家を除いたすべての罪人を滅ぼすという，いわば，浄化がなされたことを示す。この浄化が二人の愛の浄化を示唆するのである。話者と恋人の二人が，さまざまな悲しみ，苦しみ，克とうを経て，次第にその愛を浄化させて行く過程がこの行以下この連の最終行迄の内容である。錬金術が，物質を浄化(純化) して行くことによって，目的物を取り出そうとするのと同じ様に，二人の愛も少しずつ官能性を取り除いて行って，純粋な愛に浄化されて行くのである。愛の官能性が人間の罪と重ね合わされて，激しい愛によって，二人の愛の官能性という罪を浄化して行ったことが示されるのである。次行の 'Chaosses' (「混沌」) も，創世記の天地創造に関係し，天と地の分かれていない状態を言う語で，物質の存在しないことを示唆する。つまり，「全世界」('the whole world') から「洪水」('flood') を経て「混沌」('Chaosses') への逆行は二人の愛が浄化されたこと，愛の官能性を伴わない霊的愛に達したことを暗示するのである。この逆行は錬金術の基本的考え方でもある。因みに 'Chaosses' は錬金術用語[14] で，天と地ができる前の四元素の混沌状態を言う語である。もちろん，「混沌」を含むこの句は浄化の論理を支えるだけではなく，話者の情緒を伝えるものである。「他のものに気を取られると，僕たちは混沌となった」('oft did we grow／To be two Chaosses, when we did show／Care to ought else ; ' ll. 6−8) という表現は恋人たちの気持をよく伝えるものである。前の句と共に，話者と恋人の二人の愛の強さ，深さをうかがうことができる。できることならば，いつも一緒にいて，二人だけの時間を過したいものである。こういう想いが，また，今は亡き恋人に取り残された話者の絶望的な気持を浮き彫りにするのである。最後に話者が旅に出かけると，二人はもう死んだも同然になるという二人の愛の激しさが述べられる。「旅に出かけると，二人の魂はよく抜け出し，二人は屍となった」('and often absences／Withdrew our soules, and made us carcasses.' ll. 8−9) のである。'absences' は二人が離れ離れになることを表す語である。*A valediction : forbidding mourning* に描かれた旅の別れによる話者の恋人に対する豊かな情感が，本詩の別れ ('absences') が死 ('carcasses') に等しいことを説明してくれる。恋人たちにとって，別れ程つらく悲しいものはなく，旅の期間が長ければ長い程，また，二人の距離が離れれば離れる程悲しみは大きく，さまざまな不安を抱かざるを得ないのである。また，「魂が脱け出す」('Withdrew our soules') ことは *The Extasie* にも 'Our soules, (which to advance their state,／Were gone out,) hung 'twixt her, and mee.' (ll. 15−16) と描かれており，魂の脱け出た身体は，'Wee like sepulchrall statues lay ; ' (l. 18) と表され，本詩の 'carcasses' 同様，死のimageで描かれている。魂の脱け出た後の身体は生気を失った残骸であり，魂は肉体から解放されることによってより霊的になるのである。つまり，'soules' と 'carcasses' という二語によって，二人は肉体という不純物を取り除いて，純粋な浄化された愛を体験していることを示すのである。従って，'absences' という語で示されるように，肉体の不在，つまり，愛の官能性をなくすことによって，二人は純粋で霊的な愛を既に何度か体験していることを語ることになるのである。これはこの連の4行目以降の愛の浄化の最終段階であり，不純なものを取り除いて，より純粋なものを得ようとする錬金術の操作過程から言えば，昇華にあたる段階である。故に，話者は，恋人の生前に既に，

「第五元素」(St. Ⅱ, l. 6) を得るための過程を経ていることを示していることになるのである。現実の世の恋人たちでは至難の業である愛の奥義の解明は，これらの行に表された激しく厳しい愛の試練を経ることによってのみなされ得るのである。また，二人の愛の世界は，錬金術の metaphor によってのみ説明されるものではなく，「洪水」と「混沌」によって示唆される天地創造の metaphor によっても説明されている。ノアの方舟から天と地の分れる前の混沌に逆上る創世記への言及が，更に，次連２行目の'the first nothing'（「太初の無」）を導き出すことになるのである。「僕は，彼女の死によって（この言葉は彼女を傷つけることになるが），いま，太初の無となった。その無からエリキサが生れたのだ。」（'But I am by her death, (which word wrongs her)／Of the first nothing, the Elixer grown ; ' ll. 1－2) と話者が言い得るのは，話者が，いま述べたように，愛のさまざまな試練を経て，官能を伴わない霊的愛を体験してきたからである。「太初の無」とは，前連の天地創造の metaphor を受けて，「混沌」と同様天地の分れる前の状態を指す語であるが，T. Redpath 氏が言うように，'...Ideas in the mind of God'[15] と解釈できる。話者は，天地創造にあたって神の心にあったイデアそのものであることを示唆して，自らの愛の霊性とその永遠性を強調し，俗人ではなし得ない愛の奥義を極めた故に愛の聖人であることを示唆するのである。話者と共に生前幾多の試練を受け，愛を浄化してきた恋人も，霊的愛を体験しており，彼女の死は肉体の死であって，彼女そのものの死ではないから，「死という言葉は彼女を傷つける」（'which word wrongs her'）ことになるのだ。恋人も話者と同様愛の聖人であることが示唆されているのである。恋人が愛の聖人であるということが，この詩の題の聖ルーシーと重ね合わされて，最終連の最後で，復活する彼女の喜びがうたわれるのである。さて，'Elixer'（エリキサ）は 'The quintessence or soul of a thing....'（OED, 3. b.）であり，'quintessence' と同一のものとして使われている。しかし，内包された意味は，'quintessence' より 'Elixer' の方が具体的である。前に述べたように，天界が第五元素だけで構成されているということから，話者の愛の霊性と永遠性が説明できたのであるが，'Elixer' には 'A supposed drug or essence with the property of indefinitely prolonging life,....'（OED, 2.）の意味があり，これによって，話者の愛の永遠性が明確に表されるのである。もちろん，'Elixer' は錬金術用語で，金属を金に変えるものである[16]。金は四元素が均等に混ぜ合わされている[17] 故に，永遠の存在と考えられていたものである。さて，この「エリキサは太初の無から生まれた」（'Of the first nothing, the Elixer grown ;' 1. 2）という表現はこの詩の冒頭から続いて来た逆説の論理をみごとに解明してくれるものなのである。第１連の話者の死の意識が第２・３連での無を生み，これが錬金術の mataphor によって，新しい生となるという逆説，つまり，無は有の始まり，更に，死による無こそが正に永遠の生命を生むという逆説を成立させてきたのであるが，神のイデアに喩えられたこの「太初の無」は話者が霊的永遠の愛の極地に達したことを物語ることになるのである。逆説の論理は，「太初の無」に至って完成し，みごとに他者を超えることになるのである。次の行からこの連の最終行にわたって，話者は自分が無であることを，「存在の鎖」に従って，より具体的に説明する。つまり，再び話者は外の世界に眼を向けるが，今述べたことからわかるように，もはや他者に対する羨望の眼差しはここにはない。話者は自らの無を人・動物・植物・鉱物（石）と比較しながら説明し，強調することによって，次の最終連で他者と対峙し，決別するのである。さて，「僕が人間だったら，かつてはそうだったが，なすべきことがわからなければならない」（'Were

I a man, that I were one,／I needs must know ;' ll. 3−4) という表現は話者がもはや人間でないことを言及するものである。話者が人間でないことは「死」や「無」で説明されているが，ここでは，より具体的に説明することによって，徹底的に自己否定を行うのである。人間には事に当たってどうすればよいのか，何をなすべきなのか（'needs'）を考える能力があり，この思考能力が人と動物を区別するものと考えられていたのである。どうすればよいのかわからないのは動物と同じになるのだが，これは第1連の話者の死の意識を言及するもので，恋人を亡くして呆然自失の話者を示すものである。深い悲しみと絶望感が話者に襲いかかり，話者は思考能力をなくしただけでなく，動物の持つ本能的な行動すら取れないでいるのである。「獣なら，目的を選び，その目的を達するための手段を選ぶ」（'I should preferre,／If I were any beast,／Some ends, some means ;' ll. 4−6）のに，話者には行動するための目的すらなく，従って，その目的を達成するための手段すら持てないのである。行動の目的は恋人だったのだから，その恋人がいなくなった今となっては，生きて行く目的もないのである。話者は今や動物以下である。いや，動物以下の植物でも，鉱物でもないことが，「そうだ，植物だって，石だって，憎んだり，愛したりする」（'Yea plants, yea stones detest,／And love;' ll. 6−7）で表される。植物には「生命」（'Life' St. Ⅲ, l. 2）があり，生きて行く上で必要なものとそうでないものを区別する（'detest' 'love'）ことができる。植物の向日性がその例となるであろう。石（'stones'）については磁気を帯びた鉱物を考えればよいであろう。磁石の誘引と反発がそれぞれ 'love' であり 'detest' である。従って，話者は人を人たらしめる一切のものをなくしているばかりか，石のような形相（'forme' St. Ⅲ, l. 2）もなく，正に無であることをまとめて「すべてのものは何らかの特性が与えられている」（'All, all some properties invest ;' l. 7）のに話者には一切がないと言うのである。この無という話者の自己破壊が，更に，徹底して次の2行で行われている。「僕が普通の無なら，影のように光と物がなければならない」（'If I an ordinary nothing were,／As shadow, a light, and body must be here.' ll. 8−9）という表現によって，影のような可視の無を否定する。影は確かに物そのもの，あるいは，実体ではないが，光と物という実体によって生れるものであり，人間の視覚でとらえられるものであるから，完全な無ではないのである。完全な無とは「太初の無」であり，次連冒頭の 'None' である。「第五元素」や「エリキサ」で説明されるような，人間の五感ではとらえられないが，しかし，実在するものでなければならないのである。この連3行目からの存在するものに対する徹底的な否定は，「太初の無」の強調であり，話者の愛の霊性と永遠性の誇示である。一切の存在に対する否定から生まれる無は「太初の無」であり，「太初の無」はすべての始まりだという逆説が再度構成されるのである。さて，次連冒頭の「しかし，僕は無だ」（'But I am None ;'）の「無」（'None'）は「太初の無」のことである。「太初の無」となったから「僕の太陽は登らない」（'nor will my Sunne renew.' l. 1）ことになっても，もはや悲しみはないという話者の確信がここに述べられているのである。'my Sunne' とは恋人のことだが，亡くなった「恋人がよみがえらないであろう」と未来形（'will'）で表すのは，先ず，今述べたような話者の悲しみの鎮静化を示すためである。「よみがえらない」という断定的な表現は悲しみの情を伴うことになる。また，この未来形は，'The Sunne'（St. Ⅰ, l. 3）や次行の 'the lesser Sunne' が冬至を過ぎると自然も新しい春を迎えるようには彼女はよみがえらないが，新しい世界で彼女がよみがえることを示唆する。かつて，現実の世界で話者の「太陽」であった恋人は，今，話

者の意識の世界で新しい太陽となって，話者に生きる喜びと希望を再び与えているのである。この話者の意識が，この詩の冒頭からの死にとらわれた絶望的境地から，話者を救い出すのである。また，話者の新しい太陽の発見は現実の世界の徹底的否定によって生まれたものだから，話者が現実を拒否し，否定しているのは明らかである。話者の意識の外の世界の否定は現実の世界に対する決別を示し，浄化されない現実に対する話者の否定・拒否の表れである。これが次行から5行目迄の話者の現実の世界に対するironyとなって表される。「恋人たちよ，あなた方のために，今，力の衰えた太陽が山羊座に入って，新しい情欲を得，あなた方に与えてくれる。夏を余すこと楽しむがいい。」（'You lovers, for whose sake, the lesser Sunne／At this time to the Goat is runne／To fetch new lust, and give it you,／Enjoy your summer all'; ll. 2－5）と，またもや話者は外の世界（他者）を意識するが，これ迄とはすっかり異なり，他者を突き放す姿勢が話者の中に見られる。ここには，愛の官能性にとらわれている現実の世界の恋人たちに対するironyが込められているのである。'the lesser Sunne' は第1連の冬至の日の力の衰えた太陽のことだが，'my Sunne' と対比して用いられている。'the whole world, us two'（St. Ⅲ, l. 6）で表されるように，話者と恋人は二人で完全で充足した一つの世界を持つのだから，話者にとって，恋人という太陽が現実の太陽より大きいのは当然のことである。また，現実の恋人たちの愛を象徴する太陽が，話者の恋人に対する愛を象徴する太陽と比べて，'lesser' であるのも当然である。'my Sunne' と 'the lesser Sunne' によって，両者の愛の違いが表されるのであるが，「山羊座」（'the Goat'），「新しい情欲」（'new lust'），「夏」（'summer'）という語句を使って，話者は現実の世の恋人たちの愛の官能性をより明確に示すのである。「山羊座」は12宮図では Capricorn（磨羯宮）であるが，T. Redpath 氏がその注で 'the goat being notoriously the most lusful of animals.'[18] と言うように，次行の「情欲」を導き出すために用いられたものでもある。「情欲」という激しい言葉を使うことによって，現実の世界の恋人たちの愛の官能性が的確に表されると同時に，その愛の浄化されることのない不純性が示されることになる。冬至の日が過ぎ，やがて明け来る朝に昇る太陽は失った力を取り戻し，自然界をよみがえらせるのだが，結局は物質存在としての再生でしかなく，新しい世界が巡って来ても，現実の世界の恋人たちは，また「新しい情欲」を満たそうとするだけである。これは 'flood'（St. Ⅲ, l. 4）に表されたノアの故事を想起させると同時に，話者の他者に対する諦観を示すことになる。最後に，旺盛な情欲とその発散を，生命力豊かな「夏」に重ねて，その「夏を余すところなく楽しむのがよい」という句の中に，現実世界に対する irony 以上のきっぱりとした話者の決別の意志が明確に表されているのである。そして，話者は，次行以下最終行にわたって，愛の霊性と永遠性を喜び楽しむ姿を述べ，現実の世の恋人たちとの愛の違いを際立たせるのである。「彼女は今，長い夜の饗宴を楽しんでいるのだから」（'Since shee enjoyes her long nights festivall,' l. 6）という句の中の 'enjoyes' という語が前行の官能愛の喜びを示す 'Enjoy' と鮮やかな対照をなすのである。霊と肉の対照である。'her long nights' とは，恋人の死による眠りを指す語だが，前に述べたように，*The Valediction : forbidding mourning* 第1連に表された聖人の死に対する認識，つまり，死は魂の肉体からの解放だという考え方がここにもあり，恋人は死によって魂が解放された事を喜ぶ（'enjoyes'）のである。恋人が聖人に喩えられていることは既に述べた通りである。また，恋人の喜びは 'festivall' という語によって伝えられるが，この語には復活の意味が内包されている。John Donne は コリント人へ

の第一の手紙の第15章第26節に関する説教の中で，これは T. Redpath 氏[19] の指摘によるものだが，'...to so long a Festivall as never shall end, the Resurrection, wee may well begin the Eve betimes.'[20] と言っている。これによると復活は終ることのない饗宴である。従って，'festivall' に，恋人の復活・再生の意味が込められていることが明確になる。'festivall' に込められた復活の前夜を恋人と楽しんでいることにもなるのである。この恋人の喜びにあずかりたいという話者の気持が次行の「彼女の所へ行く準備をさせてくれ」('Let mee prepare towards her,' l. 7) という表現に込められている。話者は愛の聖人であるからやがて復活するであろうことは自明である。しかし，この句には，自殺志向すら嗅ぎ取れる程の話者の恋人に対する強い気持，つまり，一時でも早く恋人と一緒になりたいという気持が表されている。やがて朝が来，恋人が復活する迄の短い期間に話者も準備して彼女のもとへ行きたいという焦りにも似た気持が，'prepare' に示されているのである。また，'Let mee prepare' は他者に対して言う語句で，同行後半の 'let mee call' と共に，話者の他者に対する意識を示す語である。ここには，「情欲」「夏」で表された他者に対する話者の決別の情が示されているだけでなく，他者に対する諦念さえ感じ取れるものがある。故に，話者の他者に対する強い拒否の気持が話者に「準備」を急がせることになるのである。さて，最終2行には，宗教用語が使われて，恋人の復活が示されている。「今を彼女の通夜，彼女の宵と呼ばせてくれ。今宵が一年の，一日の深い真夜中だから」('and let mee call／This houre her Vigill, and her Eve, since this／Both the yeares, and the dayes deep midnight is.' ll. 7−9) という表現は恋人を弔う話者の気持が表されたものである。'Vigill' は「通夜」の意味で使われ，'This houre' は，今正にこの時に，話者が恋人を前にしていることを示す。つまり，これらの語は話者が夜を徹して恋人のそばにつきっきりになっていることを示すのである。'Vigill' には，また，宗教用語として「徹夜のお勤め（祈り）」の意味があり，上述のことを証明してくれる。次の 'Eve' は Christmas (Easter) Eve のことで，恋人の復活を示す語である。また，'Eve' は「前夜祭」であり，これは 'feativall' の具体的意味となり，恋人の復活の喜びを更に明確に伝えることになる。最後の 'deep midnight' の 'deep' は深い夜のしじまを表すと同時に，話者の恋人に対する深い想を示し，'midnight' は恋人の死を示すと同時に，やがて明ける朝の示す復活・再生を示唆する。正に生と死を同時に孕んだ「真夜中」が「一日の」「一年の」と広げられることによって，今夜が話者にとって特別な日であることを示すと共に，今日が一年に一度巡り来る「聖ルーシーの日」に重ねられて，この詩の冒頭へとつながって行くのである。

Ⅲ

この詩は，恋人の死によって，深い絶望に陥った話者が，その悲しみを克服することを描いたものであるが，話者が絶えず他者を意識するところに特徴がある。どの連を取って見ても必ず他者が意識されており，しかもその意識のあり方は，同化・分離・対立・接近・否定といった言葉で表されるように，いはば，ジグザグである。この話者の他者意識とその複雑な表れ方は一体何を意味するのか，また，ニヒリスティックとも言える話者の自己否定による自己破壊は一体何を意味するのかを先ず，ここで，考えてみたい。話者の他者意識が表れるのは第1連最終2行である。本論Ⅱで述べたように，それ迄の話

者と自然との同化，ないしは，一体化が，‘Epitaph’と‘laugh’によって崩れ，両者が分離されるのである。話者は自分を「墓銘碑」に喩えることによって，いま死んだ自然よりその悲しみが深く重いことを示す。従って，自然は「笑っているように見える」のである。この悲しみの違いと死の時間のずれが話者をして他者を意識させ，「笑い」が他者との対立を生む契機となり，第2連冒頭2行で他者との対立が明確に表されることになるのである。いま死んだ自然はやがて春を迎えるが，恋人を亡くした話者に再び春が巡り来ることはない。この話者の他者に対する意識は，「次の春」（St. Ⅱ，l. 2）に表されるのだが，その対立意識は「新しい情欲」（St. Ⅴ，l. 4）によって，更に明確に具体的に表される。これは他者の愛の官能性を示すと同時に，話者の霊的な愛との対立をくっきりと浮かび上がらせるものである。この話者の対立意識が第4連での現実の世界に対する徹底的否定となるのである。他者の愛の官能性を否定することで話者は自らの愛の霊性を強調し，他者に対してその愛を誇示することになるのである。しかし，これは，いはば，話者の心情の論理であって，話者は自らの愛を誇示することによってしか，その悲しみを克服できないのである。恋人喪失による愛の世界の崩壊の悲しみをいやすには，現実を，他者を突き放し，拒否するしかないのである。従って，他者否定は話者の悲しみの表れであるから，この二つのものは表裏一体の関係にあると言える。また，話者の悲しみは，恋人喪失が原因であることは当然であるが，実はそのために愛の官能性をも喪失する悲しみでもあるのだ。形あるもの，つまり，愛の官能性の激しい否定は愛の官能性にとらわれた話者の徹底的自己否定なのである。第2連で，錬金術のmetaphorによって，「新しい錬金術」を生み，「第五元素」となった話者が，尚且つ，第3連冒頭2行で他者に強い関心を抱き，形あるものを羨しがるのは，恋人を亡くすことによって肉体という愛の官能性をも同時に失ったからである。この2行に表される他者への接近は話者の愛の官能性に対する強い関心を示すものである。ここに，愛の官能性に対する話者の心のぐらつきが示され，他者に対するジグザグな話者の意識のあり方が求められるのである。話者の心の内にある理性と感情の克とうが話者の心の動揺を引き起こすのだが，これは霊と肉の問題である。本来宗教問題である霊と肉の二元論が話者の愛の官能性に対する心の動揺として表されているのである。かつてあった揺るぎない霊の絶対的優位性が崩れ始め，それが個人の内面分裂を引き起こすのである。しかし，話者の心の動揺も次の第4連で現実の世界の形あるもの，肉体であり，愛の官能性であるが，の徹底的否定によって鎮められる。これが第4連に見られるニヒリスティックとも言える話者の自己否定・自己破壊となるのである。本論で述べた通り，ノアの方舟によって示された人間の罪が愛の官能性として表されているように，話者は自らの内にある官能性という罪を否定すること，つまり，徹底的に自己を破壊することによって，自分の愛を浄化し，霊的永遠の愛の世界を勝ち取るのである。また，徹底的他者否定によってなされた話者のこの世界が，故に，他者から隔離された世界であることも本論で述べた通りである。この他者から隔離された話者の愛の世界が蒸留器という小さなもので表されていることが本詩のもう1つの大きな特徴である。蒸留器はフラスコその他の器具からなるものであるが，我々が化学の実験に使う器具と大差のない小さなものである。また，蒸留器の本体として使うフラスコの口は狭く，しかも，「錬金術師」のさし絵[21]によると，その口を覆い包むように他の違う器具がかぶせられている。これは話者の愛の世界の完全充足性述べるのに都合がよいが，他方では，完全に密閉され隔離されたという印象を伴うことになる。このより完全で充足した世界をより小さなものに求めようとする話者の志向は，本論で引用した

The good-morrow にも見られるが *The Canonization* にも表されている。

And if unfit for tombes and hearse
Our legend bee, it will be fit for verse ;
And if no peece of Chronicle wee prove,
We'll build in sonnets pretty roomes ;
As well a well wrought urne becomes
The greatest ashes, as halfe-acre tombes,　(St. Ⅳ, ll. 2−7)

に見られるように，「墓や柩」に対して「詩」に，「年代記の一頁」に対して「ソネットの中の美しい部屋」に，「半エーカーの墓」に対して「巧みに造られた骨つぼ」に，というように小さなものに話者の愛の世界が喩えられている。この詩は話者の恋愛に反対する友人に対する反発として書れたという形式になっているが，友人は話者の愛の世界に対して現実の世界を表すものである。そしてこの小さなものへの喩えに，現実の世界との全面的対決というよりは，現実の世界に背を向ける話者の姿が表されているのである。本詩の話者も，自らの愛を愛の聖典である「墓銘碑」に喩え，更に，「第五元素」「エリキサ」「太初の無」に喩えて現実の世界を凌駕したにもかかわらず，「蒸留器」という小さなものにその愛の世界を喩えるのは，同様に，話者の中に反社会的志向があるからである。もちろん，「第五元素」「エリキサ」「太初の無」はすべて話者の愛の世界の喩えであり，その愛に霊性・永遠性を与えるのに有効であるが，これらは話者の意識の中に厳然としてある愛の世界を表すには具体性に欠け，不充分である。「蒸留器」は現実にあるものであると同時に，密閉された空間を構成するもので，完全充足した話者の世界を語るにふさわしいものである。この「蒸留器」によって，現実の世界から隔離された独自の空間を生み出すことができるのである。また，密閉され隔離された空間はより小さくなる程その完全充足性を満たすことになるとも考えられる。隔離された話者の愛の世界は現実の拒否・否定によって生まれた世界であるが，その現実の世界に対する話者の抵抗の気持が強い程その愛の世界は小さくなるものである。話者の現実否定は愛の官能性の否定であり，これは話者自身の中にある官能性の否定でもあった。これがニヒリスティックとも言える話者の自己破壊となって現れたのであるが，同時に，これは話者の理性と感情の激しい克とうを示すものである。そして，この克とうが，霊と肉の二元論に引き裂かれた話者の内面を映し出すものであることは前に述べた通りである。もともと宗教問題であったこの二元論は霊の絶対的優位に対する疑問に始まるものである。これ迄確固としてあった伝統的価値観が揺らぎ，しかし，まだ新しい時代が明確な姿を現さない，いはば，分裂の時代が話者の時代なのである。'flasks' (St. Ⅰ, l. 2) に錬金術の衰退の暗示があることは本論で述べた通りである。錬金術思想は「存在の鎖」の思想と共にこの時代の中核をなすものであると同時に，両思想の基本は，本詩に語られた第五元素に表されているように，同じなのである。それは両思想がキリスト教思想を基盤としているからである。従って，この時代の中心的思想のすべてが崩れ始めていることになるのである。つまり，話者の他者否定はすべてのものが崩れ始めた分裂の時代に対する話者のもがきであり，抵抗を表すものなのである。分裂し崩壊し始めた時代だからこそ自己の世界を確立し，守るために時代を否定しなけれ

ばならなくなるのである。こういう価値観の崩壊の時代を考えると，現実から隔離された小さな世界がJohn Donneの詩のみに現れるものでないということは容易に推測できるであろう。若桑みどり氏は「マニエリスム芸術論」の中で次のようなことを述べている。イタリアのフィレンツェの市庁舎の広大な広間の片隅に，異様に狭い小部屋があり，この小部屋には窓がなく，壁面はすべて上下二列の板絵に覆われており，天井一面に絵が描かれている。これらの板絵や天井画は1569年以降のものであり，この小部屋が「マニエリストの宇宙」を表すと言っている[22]。この小部屋は密閉された完全な一つの世界をなすもので，本詩の「蒸留器」に表された空間と同質のものである。つまり，小さなものへの志向がJohn Donne特有のものではないことがこれによって証明されるのである。従って，本詩の話者の中に表された小さなものへの志向はマニエリストとしてのJohn donneの一端を示すものであることがわかるのである。

注

1) H. J. C. Grierson ed., *The Poems of John Donne*, Oxford, 1968, vol. Ⅰ. 以下本文中の詩の引用はこの版によるものとする。
2) 'To experience a day as short as this one would need to be further north than Donne is ever known to have travelled.' (H. Gardner ed., *The Elegies and the Songs and Sonnets of John Donne*, Oxford, 1970, p. 217.)
3) '...the stars, which were thought to store up light from the sun.' (*Ibid.*, p. 217.)
4) *Ibid.*, p. 217.
5) *Oxford English Dictionary*, Oxford, 1970. 以下本文中のOEDの引用はこの版によるものとする。
6) '...insatiably thirsty ;' (T. Redpath, *The Songs & Sonets of John Donne*, Methuen, 1983, p. 301.)
7) 'The image is probably that of a dying man whose life has ebbed away to his feet, and so to the foot of the bed. Some cases of death can plausibly be conceived in that way.' (*Ibid.*, p. 301.)
8) E. M. W. Tillyard, *The Elizabethan World Picture*, Chatto & Windus, 1967., A. O. Lovejoy, *The Great Chain of Being*, Harvard University Press, 1971., 山田耕士他訳 「天球の音楽」 平凡社 1990年 (S. K. Heninger, Jr., *Touches of Sweet Harmony*), 大沼忠弘他訳 「人間 密義の神教」 人文書院 1982年 (M. P. Hall, *Man The Grand Symbols of the Mysteries*)
9) J. M. Mazzeo, *Renaissance & Seventeenth-Century Studies*, Colombia University Press, 1968, Chapter Ⅳ., E. Crawshaw, *Hermetic Elements in Donne's Poetic Vision* in *John Donne Essays in Celebration*, ed. A. J. Smith, Methuen, 1972, pp. 324－348. W. Shumaker, *The Occult Sciences in the Renaissance*, University of California Press, 1979, Chapter Four., 種村季弘訳 「錬金術」 青土社 昭和47年 第Ⅰ・Ⅱ章 (Rudolf Bernoulli, *Seelische Entwicklung im Spiegel der Alchemie*),

有田忠郎訳 「ヘルメス叢書1～7」 白水社 1977年, 平田・大槻共訳 「錬金術師」 人文書院 1978年 (F. S. Taylor, *The Alchemists, Founders of Modern Chemistry*), 大沼忠弘他訳 「象徴哲学大系Ⅳ 錬金術」 人文書院 1981年 (M. A. Hall, *An Encyclopedic Outline of Masonic, Hermetic, Cabalistic and Rosicrucion Symbolical Philosophy*), 平田寛訳「魔法」 人文書院 1991年 (K. Seligmann, The Historyof Magic)

10) H. Gardner, *op. cit.*, p. 217.

11) E. M. W. Tillyard, *op. cit.*, その他。注8を参照。

12) "The 'fifth essence' of ancient and mediaeval philosophy, supposed to be the substance of which the heavenly bodies were composed, and to be actually latent in all things, the extraction of it by distillation or other methods being one of the great objects of alchemy." (OED, 1.)

13) '...broken down into elements.' (C. A. Patrides ed., *The Complete English Poems of John Donne*, Dent, 1985, p. 91.)

14) 種村季弘訳, *op. cit.*, p. 47, 図, 平田寛訳, *op. cit.*, p. 154, 図45.

15) T. Redpath, *op. cit.*, p. 302.

16) '...to change metals into gold.' (OED, Elixer, 1.)

17) 'Gold was king of metals, the sum of all metallic virtues; and alchemically it was a mixture of the elements in a perfect proportion.' (E. M. W. Tillyard, *op. cit.*, p. 59.)

18) T. Redpath, *op. cit.*, p. 303.

19) *Ibid.*, p. 303.

20) G. R. Potter and E. M. Simpson ed., *The Sermons* of *John Donne*, University of California Press, 1984, vol. Ⅳ, p. 45, ll. 3－4.

21) 平田・大槻共訳, *op. cit.*, 第4章 図2－5及び7.

22) 若桑みどり 「マニエリスム芸術論」 岩崎美術社 1980年 pp. 270－302.

(1991年10月25日受理)